【高等学校用】

令和4年度学校評価 結果

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	佐賀県立高志館高等学校

1　前年度 評価結果の概要	・全職員が「OneTeam」となり学校教育目標の実現に組織的に取り組み、農業の専門高校の特徴を活かした活動等を行い地域からも評価を得ている。 ・各分野で新たな取り組みを始め、魅力ある学校づくりと地域への情報発信に重点をおいて取り組んできた。これからも地域に根ざした学校づくりを行い「生徒が行きたい」、「保護者が行かせたい」、「地域から必要とされる」そして「職員が勤務したい学校」を創っていく。 ・ICT利活用教育を推進し、わかる授業の徹底と専門高校としての教育内容の充実を図る。
2　学校教育目標	校訓「高志潔心」の理念（高い目標を持ち、目標達成に向け邁進する態度と潔い心を育てる）を指針として訓育に努める。 ①　学業の充実　　②　基本的生活習慣の確立　　③　生徒会活動、農業クラブ活動、部活動、ボランティア活動の活性化 ④　信頼される開かれた学校の推進　　⑤　専門教科の教育内容及び施設・設備の充実
3　本年度の重点目標	スローガン「ステップアップ高志館」　～マナーの向上と更なる成長を目指して～ ○専門学科の特性を活かした地域交流による「地域課題解決型コミュニティ・スクール」を目指し、地域とともにある学校づくりを推進する。 ○生徒が高い志を持ち、自らの可能性を信じて更なる「成長」を目指せるよう、授業と部活動の充実に努め、生徒が力を試す挑戦の場を多く準備する。 ○時代とともに技術は変化するが、身につけた精神は生き方を支えることを生徒に理解させ、さまざまな教育活動をとおして学力やマナーを含む、社会に貢献できる「人間力」を身につけさせる。 ○先が見えない時代にあっては、常に考え、課題を解決する「課題解決力」が備わっていることが必要であるとの認識を持ち、生徒に今は何をすべきかを常に考えさせ、責任を果たさせる中で自信を芽生えさせ、自立しようとする気持ちを育む。

4　重点取組内容・成果指標　　中間評価　　5　最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○基礎学力の向上 ○技能の向上 ○専門知識の理解向上	○基礎学力診断テストにおいて学習到達ゾーンがD2以上の生徒が1回目より2回目の方が増加する。 ○技能テスト（食品流通科）を実施し、B判定を70％以上にする。	・朝の学びの時間にマナトレを使用して、中学校までのつまづきを復習させることで、学力向上につなげる。 ・技能評価の作成と技能テストを実施し、評価のフィードバックを行う。 ・学科独自の事前学習と事後学習の実施	B	・地域での交流会、認証審査など、事前準備や指導を入れて、つつがなく実施できた。 ・1年生の熟練度に合わせて、2学期に技能テストを実施する予定。 ・1回目の基礎学力診断テストにおいて学習到達ゾーンがD2以上の生徒は67.2％であった。	B	・基礎学力診断テストの学習到達ゾーンがD2以上の生徒が1回目67.3％より2回目67.6％へとわずかながら増加した。しかしながら、2年生のCゾーン以上の割合が9％増加するなど中上位層の生徒の学力向上が見られた。 ・技能テストを実施し、90％がB判定で技術習得への向上心が育まれた。	A	・学ぶ力や学び続ける力の基礎につながり重要な取り組みであると感じた。 ・基礎学力診断テストの学習到達ゾーンの割合アップは、評価できる。 ・専門高校として特徴のある技能・科目の検討。	○教務主任 ○進路指導主事 ○各学年主任 ○各教科・学科主任
	○進路保障	○生徒の希望進路達成100%	・就職支援員による企業選択におけるアドバイスと、管理職による個別面接指導 ・生徒の進路希望に基づく企業への求人依頼とあわせて新規企業開拓5件 ・国立大学、公務員希望者に対する個別指導の充実	B	・就職支援員による個別進路指導を実施し、その後管理職及び就職支援員による面接指導を実施。 ・訪問した企業数は約60社。その中で新規企業開拓した20社から求人依頼。うち1社に応募。 ・国立大学、公務員希望者に対する個別指導を4月から計画的に実施。	B	・夏休みの全職員による徹底した面接練習、就職支援員や管理職による試験前の面接指導や面談を行い、全員の進路を決定することができた。 ・受験希望者を早い時期から募り、進路指導部で指導対策チームを作った。進捗状況を確認しながら計画的に指導を行うことで、国立大学及び国家公務員に合格者を輩出することができた。 ・一社目の試験で不合格となる生徒が見られた。	B	・希望進路100％は、高い数値目標。 ・第一希望の企業への不合格者の人数は、11／63人（17％）であった。 ・早い時期から国立大学や国家公務員対策を行うことは、合格者を輩出することで成果は見られている。	○進路指導主事 ○各学年主任 ○各教科・学科主任 ○教務主任
●心の教育	●生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳教育の全体計画に基づいて授業を行った教員90％以上 ○人権学習の実施前と実施後の心の変化調査	・人権講演会の実施 ・情報モラル教育及び人権教育を実施 ・生徒アンケート調査の実施	B	・人権講演会は、10月に実施予定。 ・情報モラル、人権教育は学期末等を利用し、紙面配付を行った。 ・人権教育HR後にアンケートを実施した。	B	・人権教育HR事前と事後のアンケートでは、人権問題について学習を通じて理解を深めていくほうが良いと考える割合が向上した。差別はしてはいけないが無くすことはできないという考えの割合が多かったことが印象的だった。	B	・講演会等の座学以外に他の評価項目からも直接、間接的に熟成されている。（ボランティア活動、部活や学校活動の係等）	○道徳教育推進教師 ○人権・同和教育担当者 ○教育情報化推進リーダー ○各学年主任
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめを認めないという意識を再確認する日を作る。 ○いじめゼロ（0）！	・いじめ防止のための標語作成を年2回実施する。学期はじめに面談を実施する。 ・各学年団で、生徒に関する情報交換会を定期的に実施し、いじめ予防と早期発見と早期対応を行う。	B	・標語作成2回実施、1学期、2学期個人面談を実施した。 ・学年会を実施し生徒の動向や不登校傾向のある生徒の情報交換および対応について検討した。	B	・いじめについて再認識する機会を作ることはできたが、意識と行動が伴わない生徒も見られるため、具体的な事例をあげていじめの定義を確認する必要がある。教育相談室への相談件数が生徒職員ともに増加し、教育相談室の認知度が高まった。その結果、担任、学年、教育相談、生徒指導が連携して対応することはできた	A	・いじめをしないことが大前提であるため生徒に意識させることは大事だが、教師が発見する目を磨いて欲しい。	○生徒指導主事 ○教育相談主任 ○各学年主任
	○特別支援教育の充実 ○多様性を認め合う生徒の育成	○学校生活において困難性をもつ生徒の把握と情報共有の場を1ヶ月に1回設定する。	・情報共有フォルダの作成・入力の呼びかけ ・学年担任団と教育相談担当との支援会議 ・SCによる特別支援教育講話	B	・個人面談の情報共有フォルダを作成し、入力の呼びかけを行った。気になる生徒について教育相談委員会を5件実施した。	A	・保健室教育相談の密な連携により、困難性やトラブルを抱えた生徒に対して、担任・学年主任・養護教諭・教育相談担当で連携して対応することができた。9割の生徒が早期で教室復帰を果たした。	A	・9割の生徒が早期で教室復帰を果たしたのは素晴らしい成果である。	○教育相談主任
●健康・体つくり	●運動週間の定着化	○体力の向上を実感した生徒の割合を70％以上にする。	・体育の授業はじめにラジオ体操・ランニング・体つくり運動を実施し、体力の向上を図る。	B	・継続的に実施することで、各種目での運動量が増えている。徐々に、体力が向上しているといえる。	B	・授業での運動量が年度始めに比べ向上し、特にランニングのスピードが上がったため体力の向上を実感した生徒は、72％で全体的に生徒の体力向上が見られた。	A	・運動は重要な生活習慣ですし体力向上の結果が出ており素晴らしいと思う。	○体育主任 ○保健主事 ○養護教諭
	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●「健康に食事は大切である」と考える生徒95％以上 ○朝食をとって登校する生徒90％以上	・保健だよりの発行 ・食に関する意識調査の実施	B	・4月下旬に「いいことたくさん朝食をとろう」というタイトルで保健だよりを発行し、朝食をとることのメリットを生徒に示した。	B	・「健康に食事は大切である」と考える生徒は97％であり、前年度に比べて増加した。 ・朝食をとって登校する生徒は83％だった。 ・11月に食事・健康に関する意識調査を実施した。	B	・朝食率83％は素晴らしいと思う。佐賀大学では70％前後です。 ・食事の栄養バランスなど中身についても関心を持ち意識を高めて欲しい。	○保健主事 ○養護教諭 ○体育主任
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・定時退勤日の設定（毎週月曜日） ・部活動休養日の設定 ・部活動顧問の複数配置 ・学校閉庁日の設定	B	・夏季休業中に3日間、学校閉庁日を設定し、教職員が休暇を取得しやすい環境を整備した。 ・全職員の時間外勤務時間の平均34時間50分であった。	B	・全職員の時間外勤務時間の平均は、31時間7分で教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守することができた。しかし、上回った職員が23人いた。 ・定時退勤日を部活動休養日である月曜日に設定し、より取得しやすい環境づくりに努めた。 ・学校閉庁日を3日間設定した。	A	・業務の質を落とさずになお一層効果的な学校運営が可能となるよう期待している。 ・定時退勤日と部活動休養日を同じ曜日にしたのは、評価できる。 ・職員の時間外勤務時間を見て仕事の分担を適切に行って欲しい。	○管理職□
	○教職員のICTスキルの向上及び生徒の1人1台端末活用の推進	○PCの活用機会の提供（資料の配付、アンケートへの回答など） ○各会議の資料のペーパレス化	・1人1台端末の活用率95％以上。 ・一人一台端末を使用し、Teamsを用いて資料を共有することでペーパレス化に繋げる。	B	・2学期にPC活用率アンケートを実施予定。 ・Teams、Forms、Zoom等活用する教員が増えてきている。職員会議のペーパーレス化は定着してきている。	A	・8割の職員がPC活用スキルが昨年より向上したと回答。職員のPC使用頻度が上がってきている。 ・1人1台端末の活用率は、95％で目標を達成することができた。 ・各会議での資料のペーパレス化ほぼ浸透しており、紙が必要な人のみ個人で印刷するようにしており効率化できている。	A	・ICTスキルは日進月歩なので身に付いたことがすぐに陳腐化（ちんぷか）する可能性がある。そんため、常に先進のことを学べるように講師を招いて講座等を開いてみてはどうだろうか。	○教育情報化推進リーダー ○教務主任

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		進捗度 （評価）	進捗状況と見通し	達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言	
◎SAGAコラボレーション・スクールを活用した魅力と活力ある学校づくり	◎魅力的な専門教育を通して各分野への興味・関心を深め明確な進路意識を育み、志を高める教育を目指す。	◎学年の枠を超えた授業を展開し、専門分野において先輩が後輩を指導する機会を設ける。 ◎教科横断型の授業を展開し、教科および科目の関連を意識させる。 ◎専門科目の学習に、興味・関心をもって取り組んだ生徒80％以上を目指す。	・実社会での専門知識の利用法など実になる学習の展開 ・地元の産業界等と連携し、外部講師による学習活動を実施するなど、より専門教育の学習内容を深める。	B	・本校出身で、佐賀県で活躍する実業家による講習会を実施し、専門科目の学習を深化させた。 ・2年生から1年生へ課題研究発表会を実施し、先輩からの助言、後輩からの質問など意見交換ができた。	B	・1年生から地域農業の課題に関心を持たせ、課題研究を行い、3月には2年生および地域の方に向けたポスター発表会を実施する予定である。 ・現場研修等を通して、興味関心を深めることができ、国家資格の合格率85.7％、専門分野への就職率50％と近年では特に高い数字に繋がった。	B	・実業高校に対する地元産業界の期待は大きいので、高校在学中から地元産業界との交流を図り、地域が抱えている課題について気づく力を養って欲しい。そして、将来的にはそれを解決する人財として育って欲しい。	○農場長 ○教務主任 ○各学科主任 ○各学年主任
★SAGAコラボレーション・スクールを活用した地域とともにある学校づくり	★特色ある専門教育を活かした地域課題解決型活動により地域への愛着を育む。 ★地元企業、大学、NPO法人等との運営協議会を開催し、魅力ある学校づくりを推進する。	★地域の学校や団体と連携し、学校や地域の施設で、学校生産物の販売・接客等を行い、地域愛を育むとともに、実践教育による学力の向上を図る。 ★地元企業、団体、大学などと連携し、地域の課題について研究活動を実施する。 ★将来、地域に貢献したいと思う生徒80％以上を目指す。	・地域施設での学校生産物販売会の運営 ・害獣対策として、大学と連携し、害獣肉を利用した肉加工実習を行う。 ・近隣施設との連携事業の展開 ・幼、小、中、特別支援学校等にて出前授業等の実施。	B	・地域の食材を使用した商品の販売を3回行い、マスコミで紹介された。 ・地元公民館と連携し、学校生産物の販売およびイートインコーナーでの接客を行い、実践的な学習指導ができた。 ・害獣肉に関する大学との連携事業については、3学期に実施予定。	A	・佐賀大学准教授により佐賀大学にてジビエ加工実習に関する講義と実習を実施し佐賀大学施設で実習を行い、地域農業への関心を高め、肉加工技術の向上が図れた。 ・地域農業の課題について研究を行い地元企業、団体、個人へ実地調査を行うなど連携がとれて地域農業への関心が高まった。また、地域に貢献したいと思う生徒は70％だった。 ・現場研修や園児・小学生との交流や地域のボランティア活動に参加し、地域産業に対する関心が高まった他、地域に貢献することができた。 ・春日公民館でのフラワーアレンジメント教室を開催し、3年草花専攻生が指導者として地域の方に学んだ技術を教えた。 ・佐賀市を盛り上げる活動として、佐賀市をイメージしたバルーン焼きを市内イベントで販売した。	A	・地域への愛着を育むための取り組みがしっかりと出来ていて嬉しい限りである。 ・「食」の重要性は今後ますます高まって行くので、ジビエ肉の活用など常に新たな課題に取り組んで欲しい。 ・地元産業界の技術力と高校生の発想力があれば、面白いことが出来るのではないかと期待している。 ・地域課題の発見や解決については、一連の手法が共有化されて継続性が確保されると学校の特徴として際立つのではないかと思います。	○農場長 ○教務主任 ○各学科主任 ○各学年主任

●・・・県共通　○・・・学校独自　◎・・・志を高める教育　★・・・唯一無二の誇り高き学校づくり

5　総合評価・ 次年度への展望	・新たな取り組みやPR活動を講じたが十分な結果をだすことが出来なかったため次年度も継続し、学校魅力の情報発信、通学しやすい環境整備、現代のニーズに合った学科編成など生徒確保への取り組みを行い、「生徒が行きたい」、「保護者が行かせたい」、「地域から必要とされる」そして「職員が勤務したい学校」を創り、地域に根ざした学校づくりを引き続き行う。 ・全職員が「OneTeam」となり学校教育目標の実現に組織的に取り組み、農業の専門高校の特徴を活かした活動等を行い地域からも評価を得ている。また、コロナ禍の中、行事の精選や効率化を図りながらも生徒にとってより良い学校生活の構築に向け取り組んだ一年であった。また、3年生は、進路決定100％を達成し卒業することができた。